

2025年度大学入学共通テストの振り返りと、 今後の指導に向けたポイント

2025年1月に現行の学習指導要領に対応した大学入学共通テストとして初めて実施された25年度大学入学共通テスト。今号は、志願状況と出題内容の観点で同テストを振り返り、今後の指導のポイントを考える。

2025年度大学入学共通テストの振り返り①

志願状況

文系、理系ともに 6教科予想平均得点率上昇

現行の学習指導要領に対応した初めての大学入学共通テスト（以下、共通テスト）である2025年度共通テストは、25年1月18日（土）と19日（日）の2日間にわたって実施された。

25年度共通テストの志願者数は49万5171人で、18歳人口の増加の影響もあり、前年から3257人（0.7%）増加した。志願者数を現役・既卒別に見ると、現役生が64344人（0.8%）増加し、既卒生は3246人（4.9%）

減少。志願者数に占める現役生比率は86%と上昇し、現役生中心の共通テストとなった。

河合塾、駿台予備学校、ベネッセコーポレーションの3社が推定した予想平均得点率は、6教科文系は62.0%、6教科理系は63.3%となった。文系、理系ともに前年の5教科900点集計の予想平均得点率から上昇した（図1）。特に、6教科文系の予想平均得点率は、共通テスト初年度だった21年度共通テストの61.3%を超え、共通テストの開始以来、最も高い結果となった。そのため、目標通り、もしくは目標点以上の点

数が取れた受験者が多かったと予想され、安全志向にはならなかった。

国公立大学は総合科学系統、私立大学は法学、保健衛生学系統が増加

ベネッセコーポレーションが収集した国公立大学の志願者数情報によると、語学や法学、社会学、総合科学、歯学、理学系統などで増加が目立った（図2）。総合科学系統では、情報に関連する学部の新設・定員増加が続いていることから、人気傾向が継続した。

首都圏・近畿圏の私立大学の志願者数を見ると、人文科学や法学、経済・経営・商学、国際関係学、芸術学、保健衛生学、歯学、理学、工学系統などで増加が目立った（図2）。

国公立大学の志願者数は やや増加

25年度大学入試における国公立大学全体の志願者数は42万8501人（対前年度指数101）と、昨年度に比べてやや増加した。設置区分別に見ると、国立大学全体の志願者数は対前年度指数100と前年度並みだが、公立大学全体の志願者数は対前年度指数104と増加した（図3）。現行の学習指導要領に対応した共通テストの負担感増加を背景に、受験科目数が比較的少ない公立大学を志願する受験生が多かったものと考えられる。

また、前期日程における2段階選抜の実施大学・学部数は36大学61学部で、第1段階選抜不合格者数は4459人と前年並みとなった（図4）。東京大学

は、理科三類を除く科類で2段階選抜の予告倍率を引き締めたが、第1段階選抜の不合格者数は893人と、前年度と同程度だった。

東京大学の影響により、 難関国立大学の志願者数が減少

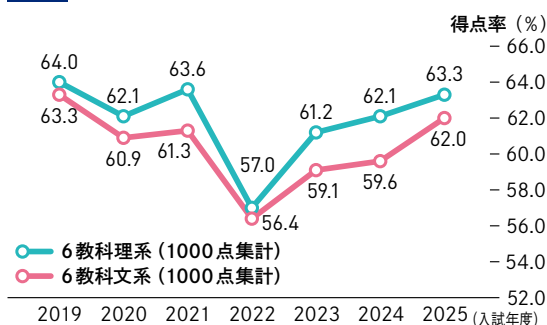
難関国立10大学（*1）全体の志願者数は7万466人（対前年度指数98）と減少した。ただし、その減少は、東京大学が理科三類を除く科類で2段階選抜の予告倍率を引き締めたことによつて、志願者数が対前年度指数89と減少した影響が大きい。東京大学を除く9大学の志願者数は対前年度指数100と前年度並みであった。

模擬試験や共通テスト自己採点集計の志望動向では難関国立10大学の志願者数は増加していたが、実際の出願では落ち着きが見られたと言える。

25年度入試では京都大学が、これまで後期日程で実施してきた法学部の特色入試を学校推薦型選抜での実施に変更した。それを受け、難関大学の法学部志望者は後期日程の選択肢が減り、神戸大学や九州大学の法学部で後期日程の志願者数の増加が見られた。

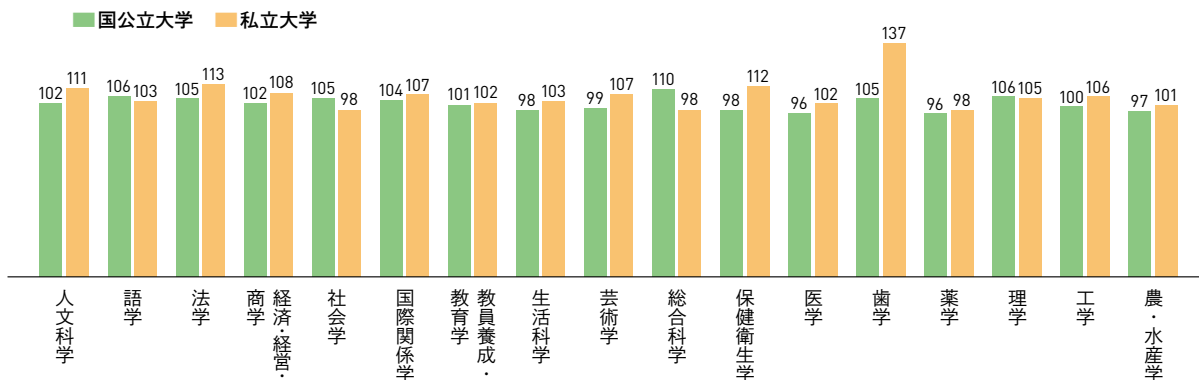
また、文部科学省の「大学・高専機能強化支援事業」（*2）の実施を背景として、各大学で情報系統学部の新設や定員増加などの動きが見られた。難関国立10大学でも名古屋大学、大阪大学、神戸大学で入学定員を増やした。大阪大学工学部電子情報工学科では、一般選抜の募集人員が145人から173人に増加したもの、前年度は工学部の中で最も実質倍率が高かったこともあり、今年度の志願者数は対前年度指数85と減少し、志願倍率は工学部の他の学科と同程度に落ち着いた。

図1 6教科（5教科）受験者の予想平均得点率の推移



※2024年度以前はデータネット実行委員会による5教科型の予想値。
※2025年度は河合塾、駿台予備学校、ベネッセコーポレーションの3社による予想値。

図2 学部系統別に見た志願者指数の変化



※数値は、前年度の志願者数を100とした時の指数。
※国公立大学の数値は、2月中旬弊社収集分より作成。私立大学の数値は、首都圏・近畿圏の大学の2月中旬弊社収集分より作成。

図3 国公立大学の志願者数

		2025年度	2024年度	対前年指数
国立大学	前期	178,611	177,520	101
	後期	121,128	122,195	99
	合計	299,739	299,715	100
公立大学	前期	57,108	54,824	104
	中期	32,841	31,068	106
	後期	38,813	37,653	103
	合計	128,762	123,545	104
国公立大学	前期	235,719	232,344	101
	中期	32,841	31,068	106
	後期	159,941	159,848	100
	合計	428,501	423,260	101

※文部科学省発表資料より作成。 ※独自日程を除く。

図4 2段階選抜実施状況

	2023年度	2024年度	2025年度
国立大学	26大学 44学部	27大学 43学部	27大学 49学部
公立大学	9大学 14学部	8大学 12学部	9大学 12学部
国公立大学	35大学 58学部	35大学 55学部	36大学 61学部
前期不合格者	3,811人	4,413人	4,459人

※文部科学省発表資料より作成。 ※前期日程分。

*1 北海道大学、東北大学、東京科学大学、東京大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、九州大学。

*2 「デジタル」「グリーン」等の分野の人材育成を継続的に支援する事業。

2025年度大学入学共通テストの振り返り②

出題内容

国語

平均点は6割を超え、
2年連続の上昇

「国語」は、第3問「実用的な文章」が追加となり、試験時間も80分から90分に延長された。大問数が増えたこともあってか、24年度までは5択の設問が中心だったが、25年度は大多数の設問が4択に変更され、全体の分量への配慮が見受けられた。また、「近代以降の文章」の第1・2問が単一テキスト型となり、複数テキストや言語活動の設問は、新設の第3問に集約された。

設問別正解率を見ると、例年と同様、「近代以降の文章」よりも、第4問の古文と第5問の漢文で差がつく設問が多かった(図5)。

共通テスト開始以来、平均点は5〜6割程度で推移していたが、分量への配慮が影響してか、25年度は6割を超えた。2年連続で平均点が大きく伸びる結果となり、26年度は難化が予想される。

数学

「数学Ⅱ、数学B、数学C」は
各成績層で差がついた

「数学」は、数学の問題発見・解決の過程を重視するという問題作成方針にのっとった出題だった。形式面では、解答群から答えを選ぶ設問、前の設問とセットで配点される設問が増えた。難易度は全体的に概ね昨年並みだった。

「数学C」が追加された「数学Ⅱ、数学B、数学C」は、大問数が4大問から6大問へ増加した。大問の選択では、「数列」と「ベクトル」を選択する生徒が多かった(図6)。成績層別の得点率では(図7)、A層(偏差値60以上)ではすべての大問で得点率が80%を超えており、差が付きにくかったと予想される。B層(偏差値40以上60未満)の得点率は40%台〜60%台だった。一方、C層(偏差値40未満)は第3問以外で得点率が25%を下回り、B層との差がついた。問題量が多いため、誘導に乗って解き進める

図5 設問別成績層別正解率グラフ

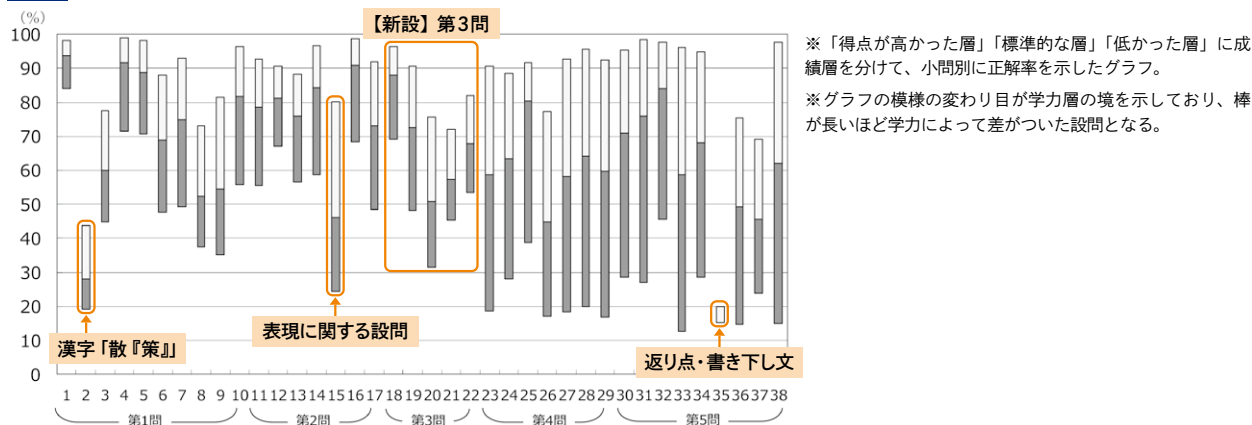
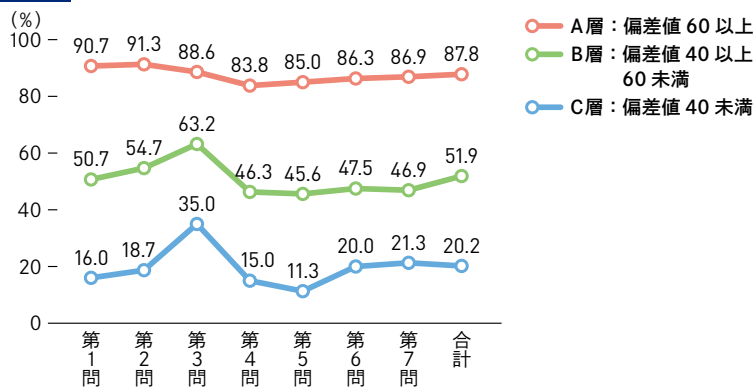


図6 「数学Ⅱ、数学B、数学C」の大問選択割合

大問	分野	選択割合 (%)
4	数列	95.4
5	統計的な推測	67.4
6	ベクトル	89.6
7	平面上の曲線と複素数平面	43.5

図7 「数学Ⅱ、数学B、数学C」の成績層別得点率



※図5～図7 共通 大学入学共通テスト自己採点集計サービスにおける解答入力方式提出者の集計。

公民

「公共・政治・経済」の受験者数が大幅に増加

ことがポイントだった。第7問では「複素数平面」が出題された。一方で、「平面上の曲線」や旧課程の数学Ⅱ・数学Bで扱われた分野融合問題は出題されず、26年度にはそうした問題が出題される可能性もあると考えられる。

「地理歴史」「公民」は6科目に科目編成が変わり、最大2科目を選択することになった。「現代社会」「倫理・政治・経済」がなくなり、特に「公共・政治・経済」の受験者が大幅に増加した(図8)。

「公共・倫理」の配点は、公共25点、倫理75点だった。第1問・第2問が「公共」と共通問題、その他の大問は「公共・倫理」の独自問題だった。第5問では、現行の学習指導要領で新たに追加された認知に関する心理学分野からの出題が見られた。

例年、「政治・経済」の平均点は5割程度で推移していたが、24年度は45点を下回った。25年度は「公共・政治・経済」の平均点は6割を超えて大幅に上昇しており、特に「公共」「公共・倫理」と

情報

第3問のプログラミングの攻略が高得点の鍵に

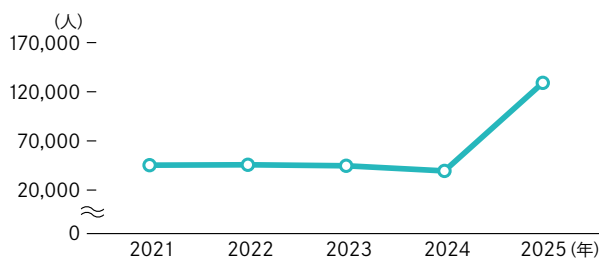
の共通問題の得点率が約7割と、他の大問に比べて高かった。「公共」と「倫理」「政治・経済」の分野バランスは、今後大きく変わることが予想される。

新たな科目の「情報」は、試作問題と同様の4大問構成で、各大問の配点も試作問題と同じだった。平均点は69・3点と、他の科目と比較しても高くなった。実施初年度だったため、難易度が調整された可能性がある。26年度に向けては、難化を見据えた指導が求められる。

第2問Aは、ポイントカードやレシートといった身近な情報システムが題材とされ(図9)、演習問題や日常生活でそれらについて考察したことがある受験生は、理解しやすかったのではないかと考えられる。

成績上位層と中下位層で特に差がついたのが第3問のプログラミングだ。中でもプログラムの構築の問題で中下位層の得点率が大幅に下がった。その問題の攻略が高得点の鍵だったと考えられる。

図8 「政治・経済」受験人数の推移



※大学入試センター 大学入学共通テスト志願者数・受験者数・平均点の推移より。
※ 2021年度は第1日程の値。

図9 特徴的な問題 第2問A
情報システム・データベース

スーパーマーケットのポイントカードの情報とレシートに印字された情報を組み合わせた分析や、ネットショッピングのシステムとの連動に関する問題

出題の特徴

示された情報システムでできることや、実現したい情報システムに対して必要な情報を、問題文や図から読み取る。問3では、絶対的な正解は実際の情報システムを見なければ分からない中で、「過不足なく含むもの」等の条件に合わせて考えることが求められた。

問3 図2は、下線部Bに示すLikeWingの情報システムにおける主な情報の流れと商品の流れを表している。なお、顧客は必ずポイントカードを提示して商品を購入するものとする。

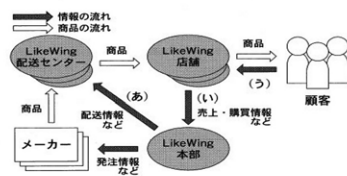


図2 LikeWingの情報システムにおける主な情報の流れと商品の流れ

図2の中で、次のⅠ・Ⅱの情報のそれぞれが必要とされる情報の流れ(図2のあ～う)を過不足なく含むものを、後の㉑～㉔のうちから一つずつ選べ。

- Ⅰ 店コード
Ⅱ ポイント会員ID

- ㉑ あ ㉒ い ㉓ う ㉔ あ、い
㉕ あ、う ㉖ い、う ㉗ あ、い、う

※ 2025年度大学入学共通テスト(本試験)より。

「新課程2期生の受験戦略」 オンラインセミナー アーカイブ動画

https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/article/20250120_seminar/index.html

現行の学習指導要領に対応した大学入学共通テストとして初めて実施された2025年度大学入学共通テストの分析結果から、新課程2期生の教科指導について解説したオンラインセミナーのアーカイブ動画を、Benesse High School Onlineに掲載しています。本誌ではご紹介できなかった教科・科目についても掲載しておりますので、ぜひ、ご覧ください。